

【六月の言葉（令和八年）】

自分の考えは絶対ではない

『如来誓願の薬は、よくせいがん智愚の毒を減ちぐするなり。』

（教行信証）

新型コロナウイルスにもたらされた新しい生活様式によって、これまで行ってきた生活上のルールや自分の思いが、たやすくくつがえってしまったことに驚きます。たとえばマスクの着用。これまでは着けないのが普通でしたが、今では着けて外に出ることに違和感を感じなくなっています。

智者であれ愚者であれ、人間の持つ間違いないという思い込み、それを親鸞は「智愚の毒」といいます。そんな我が身を問うために、たまには寺に足を運び、教え（薬）を聴いてみましょう。自分の考えや仕事の仕方、人間関係のあり方などを振り返る機会になります。

（「人生を照らす親鸞の言葉」参照）

仏教は心のカルテであり処方箋です。煩惱という不治の病を抱えながらも自覚症状のない私たちに、主治医ブツダは、正面から包み隠さず真実を告知し、この難病と向き合って、どのよう

（吉村隆真著「心の読み薬」より）

に克服していくべきかを説かれました。教えに耳を傾け、一服の薬、いや清涼剤にしていただけばと思います。